

---

# 名探偵コナン 短編集

真知歌

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

名探偵コナン 短編集

### 【Zコード】

N4971Z

### 【作者名】

真知歌

### 【あらすじ】

リクエストOK!! 名探偵コナン短編集

新蘭、コ蘭、平和、快青、新志、コ哀、

となんでもあります

恋愛ものから組織ものまで場面はざらりのうのでも構いません

<

> - -

気軽にリクエストお願いします (^ ^〃) - III

## Five・1 露出狂の白雪姫（前書き）

こんにちわ 短編集はぢめました

リクエストお待ちしております・・・▼+

リクエストは…

?カッティングは誰と誰か

?大ざっぱで良いのでどんな場面で

?どうなつてほしか

をお願いします

今回は星野由佳里さんのリクエスト、新蘭で文化祭です

「ではこれで決まりです」

キーンゴーンカーンゴーン…

教卓に立つ教師がそつそつとタイミング良くチャイムが鳴った

やべ、こりは帝丹高校

間近に迫る文化祭での出し物の劇の役がビーツやら決まつたよつだ

黒板に書かれた“白雪姫（特別バージョン）”

その横に並んで書かれた配役

王子様…工藤新一

お姫様…毛利蘭

まあ、いつものパターンだ

だがこの白雪姫（特別バージョン）の台本を書いたのは…

「ねえ蘭 面白いでしょ？」の台本」

陽気に話す鈴木園子だということを忘れてはいけない

「ちよつと何なのよこれ～」

「あら～、お姫様が一人いちゃ不満なの～？」

そういう白雪姫（特別バージョン）にはお姫様が一人出でくるのだ

王子様は当然園子が推薦した新一

お姫様Aも当然園子が推薦した蘭

そしてお姫様Bは新一「LOVEな女子達を追つ払つて自分で立候補した園子だ

これには色々とわけあらじい

「蘭がまだ新一君にロンドンでの告白の返事しないから」「やめつけるになるのよ～」

「はあ？なにそれ？ビーフやうひ」と～へ。」

「んまあ 当日のお楽しみよ。」

鈴木財閥の令嬢は何でもありだ

「新一君も、最高の劇にしてよね～」

今にも寝そうな新一に向けて園子はそう言った

「あん？あ……」

文化祭当日

舞台裏では劇の順番が2年B組に迫っているために慌ただしかった

そんな中で

「わあー 蘭最高～」

自分が用意した衣装のドレスを着た蘭を見て瞳を輝かせる園子

「ねえ…なんかこれ白雪姫とは違くない?」

「セリフ?」

「だつて白雪姫つてこんな園子みたいに露出なんてしてないよ?」

園子オーダーのそのドレスは一応配色やデザインは白雪姫っぽくなつてしているのだが

お尻がやつと隠れるくらいの超Hで

胸元がガツツリ開き谷間が見えている

ところのような衣装だつた

「これじゃあ恥ずかしいよ~」

「大丈夫、大丈夫 じゃあ私新一君の様子見てくるから蘭はそこから出ちゃダメよ~?」

そう言って園子は更衣スペースから出ていった



## File・1 嫉妬する王子様

「新一君 入るわよ～」

そう言つて新一を覗くと

「お～！～～いじゃない～」

いかにも王子様がそこには居た

「これやつすぎじゃねえのか？」

「いいのいいの そのくらいじゃないと蘭に負けちゃうのよつ」

「蘭はどうゆう衣装なんだ？まさかこんなキラッキラしたよつなドレスとかじやねえだろうな？」

新一は横目で園子に聞いた

「キラキラしてたら蘭の美人さが増して新一君大変だもんね～」

嫌みつたらしく園子が言つ

「大丈夫よ キラキラはしないから～」

「ほんとかよ…」

不満そうな顔でボソッと呟く

『それでは2年B組で白雪姫、特別バージョンです』

いよいよ劇が始まった

『あるとこで白雪姫といつお姫様がいました…』

舞台上に光が浴びせられ蘭が登場する

「わあ～」「  
「かわいい～」「  
「毛利先輩、付き合つて～」

その蘭の姿に劇を見ていいる観客や後輩達はさう歓声をあげた

舞台裏で出番の準備をしている新一は

(そんなに?…)

まさかの一回のコアクションに驚き妬む

『白雪姫は実はもう一人いたのです…』

そして園子が登場する

「お～ほつほつ、王子様と熱い口付けを交わすのは私よ～」

蘭と似たような衣装なのに誰一人として興奮するものはいない  
それどころか皆そのなりきつてて演じる演技にひいている

『や～に来た王子様は白雪姫が一人いでビックリ…』

といひでやつと登場した新一

「おお、なんて美しい…姫…君…た…ち…」

新一は蘭を見てその美貌に惚れるものの

(やあ～のや～)お――――――――

一気に園子に対して怒りが芽生えた

「さあ 王子様どうか私と熱い口付けを…」

そんなものはおかまいなしに演技に没頭する園子

「いいえ、どうか私と口付けを…」

蘭も新一の前で恥ずかしがりながら演技に集中する

「これは困りました…

ではどちらが私にふさわしいか毒リンゴで…

「いいえ！私よ…！」

突然力強くそう言つた園子

2年B組のクラスメート達は啞然とした

なぜなら…

(園子？…間違えた？今は新一の見せ場で、そんなの台本になかったけど…)

## File・1 小悪魔なお姫様

「ああ、王子様、早く。」

近寄る園子に新一が小声で

「おめえ、間違ってるぞ」「ぐ

やつわれた園子はニンマリした

(え? ?)

訳の分からぬ新一と蘭

だが園子の演技は続いた

「さあ、王子様…

あんな姫なんかよりも私を

そう言いながら新一の腕を掴む

「や…園子?…」

「早く私と熱い口付けを…」

園子はそう言ひと新一の顔に唇を近付ける

「お、おい！いい加減にしろよな！」

観客達は真剣にその行く先を望んだ

「あん 王子様」

園子の甘い声が飛んだ瞬間……

思わず叫んだ蘭

それを聞いた園子はまた一ソマリする

「あら？ あんた王子の何なの？」

まさかのアドリブに困惑の蘭

「あんたも王子様と口付けを交わしたいのかしら?」

何かを企む園子は言った

最早“お姫様B”ではなく“鈴木園子”だ

「お…王子様と口付けを交わすのは私です」

台本のままの台詞を言つて蘭に園子は嫌気がさし更に小悪魔になった

「バカね、王子様は私が好きなのよ」

やつ言つて園子は新一に抱きついた

(園子、後で覚えてるよ…)

園子の作戦が読めた新一は心の中でやつ言つた

その瞬間“あーーーー”と思つた蘭は王子様の元へ駆け寄つた

「私は王子様が好きよ …

あんたはどうなの?はつきりしないと私が唇を奪つてしまつわよ」

最早“白雪姫”でもなければ“白雪姫（特別バージョン）”でもない

「私も……私も王子様が……好きです……」

「それで？口付けを交わしたいのかしら？」

「えへだつて今は劇中だからそんなこと言ふなよ～」

小声で園子にやつらの蘭は完全にパークつている

「バカね、これは劇なんだから台本通り“はい、したいです”って言えばいいのよー」

そう返された蘭は

「はい、私も王子様と口付けを交わしたいです……」

よし、と思った園子はあといつもしーと最後の台詞を言おうとした  
……が

「ならば王様にどちらが良いか選んで……ってあれ?…

## Five・一愛の口付け

「今まで散々な目に遭わされた新一はやつてやつた

園子の口詞の前に

抱きつく園子を払いのけ

蘭の腕を引き寄せて

自分の胸へと包み込み

抱き締めて

蘭の唇に自分の唇を重ね合わせた

それを見ている観客は呆然として中には鼻血を垂らす者もいた

(ちよつとー? 新ーー?...)

「んーんー」

蘭が喋るのになるとすると

「黙つてろ

そう一言だけ言い

再び唇を重ね合わせた

蘭の格好を目の前にする新一のキスはだんだんと深くなつていこう  
とするが…

「『みやつと、新一君!』」

まさかの園子の止めが入り急遽幕が降ろされた

そして幕の向こう側では…

「おー!! 探偵坊主!! おめえ人の娘に手エ出してただで済むと思  
うなよ!! !!」

怒鳴り散らす小五郎がいた

「新一…何やつてるのよ…」

蘭はクラスメート達を田の前に動搖した

「嫌だったか?」

もしかすると新一の方が園子よつ小悪魔だ

「嫌つてことないけど…」

「中々返事しないからいつもこのことになるのよーお~ほほほほ…まあでもこんな風になるのは予想外だったけど…、これに懲りたら蘭早く返事を新一君にしてあげなさい」

そう言われた蘭はクラスメートを一通り見回す

皆は今か今かと言わんばかりの顔で蘭を見つめている

「あの時の返事…今してもいいかな?」

「ああ

「私…、

私も…

私も新一のことが好き…」

その瞬間一気に騒ぎ出したクラスメート

「ヒュー、ヒュー、」

「遂に結婚か〜」

「よつ〜！」「藤夫妻〜！」

「おめで～りうれしい～！いい加減にしろよ、これからが見せ場なんだからよおつ！」

そう言つと新一はまた蘭を抱き寄せて

怖いくらいの包容力で包み込み

蘭の唇へまた熱い口付けをおとしたのだった

END

File・1愛の口付け（後書き）

ありがとうございます  
お疲れ様でした。

いやー蘭ちゃん羨ましいです（笑）

感想お待ちしておりますー！

## Five・2気に入らない（前書き）

「んにちは真知歌です

今回のリクエストは

またまた星野由佳里さん

ありがとうございます

新蘭でヤキモチです！！

## File・2気に入らない

「ねえ、新一どれにする?」

学校帰りに新一と雑貨屋に来た蘭

お揃いのストラップを買おうと蘭は一生懸命選んでいる

なのに新一は…

「俺はなんでもいいぜ?」

全くこの雑貨屋に興味がない

「おっ!-蘭、俺向かいにある本屋行つてくるから適当に選んどけよ  
!-」

やつぱりひとつも新一が行つてしまつた新一

「もあ~何なのよー」

「おひー出でる出でるー。」

そう嬉しそうな顔をする新一は一冊の推理小説を手に取った

昨日発売されたばかりの本だ

本屋で真剣に立ち読みを始める高校生探偵、工藤新一

・・・

気付けばあれから30分もたつていた

「蘭まだか?...」

そつ噛き向かいの雑貨屋を見てみると…

「ん? 蘭…の隣の奴誰だ?」

蘭の隣には同じ帝丹高校の制服を来た男子二人組が立ち向やら蘭と  
楽しそうに話していた

(プチッ…)

別に蘭とは付き合つている訳ではないが何か無性にイラッとした新

一は蘭の元へ走つていった

「毛利先輩つてやうやうのが好みなんすね～意外といつか可愛らしこっすね～」

蘭に氣を寄せてくる一年の男子だった

「アツアツでもいいからザインの結構好きよ」

「へえ～もしよかつたら今度一緒に遊びませんか？」

「アツアツストラップとか雑貨俺から毛利先輩に買わせてくださいーー！」

「こや～一年下の子におじつてもううひて何か氣が引けるし……」

「年下つて一個しか変わらないじゃないつすか！」

「んまあ…もうだけぞ」

「あれ？同じストラップ一個買つんすか？…もしかして工藤先輩と付き合つてゐるんすか？」

蘭が同じストラップを一個持つてゐるのに気付いた後輩は悲しそうな顔でそう聞いた

「あ～これ?…

蘭が何か言おうとするが後ろから何者かが走つてくるような気配がした

蘭と後輩二人がそちらを向くと

「あつ新一」

「く…工藤先輩」

氣に入らないような顔で後輩二人に歩み寄りこつ話し掛けた

「空手都大会優勝のこんな強エ女に何か用か?」

「と…都大会つてす」いじやないつすか!」

「それに毛利先輩は空手強くてこんな可愛らしい物が好きなんて…いいじやないつすか…ギャップ…」

「…あん?」

そうゆう後輩二人に更に近付き威嚇する



## File・2ヤキモチ

「おめえらな～空手都大会ひついたらその辺の電柱バキバキと折るんだぜ？」

「ちよっと新一！そんなことしないわよーーー！」

「まさか…しないっすよね～」

ちよっと怖くなつた後輩一人

「それにな…」

と新一は後輩一人の耳に近付き内緒話を始めた

「コシヨコシヨ…」

内緒話をされながら蘭をチラッと見た後輩

「な、なによ？…」

不思議に思つ蘭

「ハシヨ ハシヨ … ってわけなんだ」

「ま…まじっすか？」

「毛利先輩すみません、自分これから用事があるんで…」

そう顔色を悪くしながら言う後輩一人

「まつ、夜道には気を付けるんだな！」

新一がそうゆうとその後輩一人は駆け出しあつていった

「ちよつと新一何て言ったのよ?」

「あん?まあ…なアハハ~」

『まかす新一

「ちよつと俺喉乾いたからそこの自販機で飲み物かつくつからこ  
こでまつてろよ」

そつ言い本屋の前にある自販機へ行く新一

(ふう…)

まさか毛利蘭の大好物は虫料理で

朝晩の主食はカエル、それに一緒にいると大好物の虫料理を食べさせられて断ると裏拳が飛ぶ…

なんて口が裂けても言えねえぜ…）

そつ心の中で呴く新一は何処か満足げな顔をしていた

ジュースを買って蘭の元へ戻ろうとした新一はまたムカツク光景を目にした

(おいおい何だアイツ…)

今度はただの後輩やファンではなくナンパ目的のキャラそうな男三人組だった

(鼻ピに、ベロピ、金髪にツイスト…ケツきもちわりいー)

だが新一の表情は先程より余裕だった

(バーロ、チャラそうな奴を蘭が相手にするはず…

とこきなり聞こえた蘭の甲高い声

「えつ？ うなんですか～私も好きです～」

新一は目が点になつた

だがすぐにムカついた表情に変わりドンドンと歩いて蘭の元へ戻る

「どうやら蘭の持っていたお菓子の袋が会話のテーマだつたらしく

「そこのお菓子マチタウメえ

「はい、私もよく買うんです～」

そこに新一が割り込んで来た

「ちよつとすみません、この子に何か用ですか？」

不機嫌そうな顔でそう聞く新一

「あつちよつと新一、私達はただ…

「私達だあ？」

蘭のその言葉で更に機嫌が悪くなつた

「なんだ？姉ちゃんの友達か？」

「あつ幼馴染みの工藤新一です……」

（幼馴染み……ね）

## File・2仇となる

「工藤新一？なんか聞いたことあんだけど」

「さうか？」

（「こつら俺の名前知らねえのかよ…」）

イライラする新一は遂に言った

「僕は高校生探偵、工藤新一です！！！」

そしてこの娘は僕の最愛の恋人です！！！

何かあるなら僕に許可を得てから話しあげてください……！」

（新一…）

「あ～探偵ね！」

「なんだ探偵か！」

「何か大丈夫か？」

迫力のある言葉を言った新一の周りではメラメラと火があがっていた

「「なんか危なくね?」」

「「ああ、氣色わりいから帰ろつぜ……」」

そんなことを言いながらナンパ三人男は帰つていった

「ふつこの名探偵工藤新一の名を出せばたちまち恐れて帰つてゆく  
…フフ…ハツハツハツ…」

(なんか今日の新一おかしい…)

「ねえ新一！」

「なんだ?」

早々と我にかかる新一

「せつ ものの血葉つて本当?」

「あん~せつ ものの血葉?」

「ほり、最後の…ってやつ」

「…」

「俺なんか言つたか?…」

照れ臭い新一は覚えてないフリをしてとぼけてみせた

だがこれが蘭を怒らせる」とこ…

「…何よ…新一なんか知らない!!」

「軽々とあんなこと言えるなんて新一の方がチャラ男よ…もおストラップも返品してくるんだから!!新一なんか大ッ嫌い!!」  
「私今度ナンパされたらついていつちやおう!!」

その言葉に焦る新一

「ああ…わりい蘭!!【冗談だつて~】

せつと行ってしまった蘭に必死でついて行く新一

この一人が付き合に出すのはまことにまで来てこることだらう。.

END

## Five・2仇となる（後書き）

ありがとうございます

お疲れ様でした（^ ^ ○ ^ ）

「希望頂いたものと少し違つぱりでした」みんなさー…。

感想お待ちしております・・・！

一部、蘭に話し掛けたキャラそつな男に対して“新一「きもちわりい」”という言葉で表現しましたが、あくまでも新一のヤキモチで新一も作者も実際にはそう感じていることはありませんので、もし誤解される方がいましたら申し訳ありません。その辺りの「ご了承、お願いします。

File・3 河川敷で…（前書き）

今日は「哀です

ほのぼのした一人の恋愛模様をとくどく覧あれ（ ^ ^ ）・ +

## File・3 河川敷で…

「ねえ工藤君…」

「あん?」

見慣れない街の河川敷にしゃがみこみ一人で話すコナンと灰原

「キス…」

「えつー…?…」

灰原の一言に驚くコナン

当たり前だ“キス”と言ったのだから

それに続く言葉は“していい?”か“して”に決まっているとコナンは思った

「バ、バーロ…こんな真っ昼間からこんななたぐせんの人があの後ろを通じてるつづりに何言つてんだよ…」

顔が赤くなり焦るコナン

そんなコナンを横目で見て…

「“何言つてんだよ…”はあなたの方だけ…」

「えつ…?…

「キス…、川にキスが泳いでいるって言いたかつたんだけど

「あつ?あ、なんだ…」

妙に慌てているコナン

「なんだ…、じゃないでしょ?」

「えつ？」

「えつ？じゃないわよ、こんな川にキスが泳いでいるのよ。」

「あつ…ああ、本当だ…、妙だな…」

セイツのコナンだが魚のことなど今は頭になんか入っていない

そんな様子のコナンに灰原はもつ一言

「今、変なこと妄想していたでしょ？」

「く…変な」とつてなんだよ…」

「声が裏返っているわよ」

「バーロ…おめえがいきなり変な」と言こ出すからだな

「私？」

「あ、ああ……」

灰原はコナンを見つめて『پېش』と笑う

「あんだよ……」

「別に？博士が待っているから戻るわよ」

「あっしちよつ待てよー。」

そう言つて行こうとする灰原の腕をガツと掴むコナン

その衝動で灰原はコナンの上に倒れ込む

「……」

「…」

顔が赤くなる一人の時が止まる…

そんな中コナンは灰原の頬に手を添える

「キス…していいか?」

「魚のこと…」

少しどぽけてみせる灰原

すると

「違Hよ…」

そう言ひてコナンは灰原を引き寄せて軽く口付けを交わした

灰原の腕も自然とコナンの腰に回る

真つ昼間にたくさんの人が通行する中

コナンと灰原の重なりあつたシルエットが輝いて見えた

END

File・3 河川敷で…（後書き）

ありがとうございます  
お疲れ様でした！

感想お待ちしております。・・▼

## File・4届かない想い（前書き）

今回のリクエストは「哀です

途中から新志になりますが」「承ください（笑）

## File・4届かない想い

(「これで元に戻れるわね…」)

悲しげな笑みを浮かべて APTX4869 の解毒剤を見つめる灰原

『「ンンン』  
「入るぞ〜」

そう地下室のドアをノックしコナンが入ってくる

灰原はその解毒剤が入ったケースを慌てて隠す

なぜならそのケースに書かれた解毒剤の名称が

“SKSM0504”

だからだ

工藤新一と宮野志保のイニシャルに新一の誕生日…

これを見られたら一発で自分の気持ちに気付かれてしまう

(叶わない恋なら知られない方がいいわ…)

だけど…)

「 もあ、元の姿に戻るつぜ?…」

「 ねえ、上藤君…」

「 どうした?」

不思議そうな顔をするコナン

「 …なんでもないわ」

「 は?」

「 …早く解毒剤飲もうぜ?」

急かすコナンに灰原は解毒剤を手渡した

「 いいか?せーので飲むぞ?」

「 ええ」

「セーのつ……」

そのコナンの言葉で一人は同時に解毒剤を口にした

次第に体が熱くなる…

ドクンッ!!

いつもの苦しさが一人を襲う

その場に倒れ込む灰原…

(…)

その瞬間急かすコナンやコナンへ恋心を抱く自分に気をとられ大事な事を忘れていたのに気付く灰原…

(着替え…用意するの…忘れた……)

朦朧とする意識の中灰原は心の中で呟いた

数分の沈黙が続いた後、先に田を覚ましたのは灰原だつた

( !? )

( 戻つてゐる… )

富野志保に戻つた灰原

( … " )

コナンが田を覚ます前に着替えを取りに行こうとする…

が…

「んあー…」

重い唸りを上げて新一は田を覚ます

灰原はとつぞに近くにあつたシーツに身をくるめた

「…おつ戻つてゐ、工藤新一に戻つたぞーー。」

そう喜ぶ新一は

( ! ! )

「 灰原 」 灰原 ? 「

そこにはいたはずの灰原がないことに気付き辺りを見回すと  
..

## File・4 愛し合ひ想い

「灰原?...」

灰原哀の頃も綺麗だったが18歳の畠野志保の美貌は更に増しその上赤ん坊のように身に一枚のシーツを恥ずかしそうに纏つただけだ

なんとも美しかった

新一も近くにあるシーツで下半身を隠し志保に歩み寄る

「ちょっと…来ないで…」

恥ずかしそうに顔を反らす志保

そんな志保に新一は

「バーコ…、何恥ずかしがってんだよ、俺等両想いだろ?」

突然の新一の言葉にわけがわからない志保

「えつ？」

「元の姿に戻つたらおめえに俺の気持ちを伝えようと決めてたんだ  
…」  
「だからおめえの気持ちが変わる前になんとしても早く戻りたかつ  
た」

「私の気持ち…？」

「あの解毒剤の名前、俺とおめえの名前をもじって俺の誕生日、入  
れてんだろ？」

(…)

バレていた

「だつ…だつたらなによー」

恥ずかしがりキレる灰原

「んな怖え顔すんなよ…せつかくの可愛さが無しだ…」

やつ言つと新一は志保を抱き寄せた

顔が赤くなる志保

「相変わらずキザな人ね…」

志保はやつ言つ

それから次第に身に纏われたシーツはずれて薄暗い部屋の中で黒い  
一つの影は愛し合つた



## Final・4愛し合つ想い（後書き）

ありがとうございます

お疲れ様でした（ ^ ^ ^ ）

新志になつてしましましたがご満足いただけましたでしょうか？

また何かありましたらリクエストお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4971z/>

名探偵コナン 短編集

2011年12月21日09時56分発行